

生物多様性を生かした地域共創型エコツーリズムの実践と若者参加の推進

団体名●呉ゼミナール／代表者名●呉 星辰（経済学部地域システム学科・講師）

はじめに(背景・目的・目標)

能美市国造地区・鍋谷町では、高齢化に伴い、薪割りや山菜採りといった里山固有の「暮らしの知恵」が失われつつある。本活動は、こうした現場の生物文化多様性を観光資源として再評価し、持続可能なエコツーリズムのあり方を実践することを目的とする。日常的な自然体験を価値ある資源へと転換し、保全と経済性を両立させるモデルの形成を目指した。また、若者を単なる「客」ではなく地域の「共創者」として位置づけ、外部の人間が継続的に地域に関わり続けるための具体的かつシビアな条件を掴むことを最終的な目標とした。

活動内容

2025年8月と11月の計2回(延べ3日間)、金沢星稜大学の呉ゼミおよび張ゼミによるフィールドワークを実施した。8月4日は実地踏査による地理的条件の確認を行い、11月14日には移住起業家4名との1.5時間に及ぶ徹底討論および「アドベンチャーガーデン能美」での木育体験を実施した。翌15日には拠点再生を目的とした空き家改造ボランティアに学生全員で従事し、住民との交流を図った。また、関連イベント「ノミ・ルーツ・フェスティバル」では、市内外から親子連れら9名が参加し、収穫体験やワークショップを通じて地域の魅力に触れる機会を創出した。

成果、結果の考察

活動を通じ、薪割りや伝統家屋の空間的価値が、都市部や若年層にとって極めて高い「市場価値」を有していることが確認された。筋肉痛を伴う肉体労働を通じた介入は、住民の心を動かし、若者が地域に活気を与える「触媒」として機能することを証明した。考察として、公共交通機関の欠如という物理的な「移動の壁」が観光周遊の大きな阻害要因であることが浮き彫りとなった。また、地域の持続可能性にはボランティア精神のみに頼るのではなく、適切な価格設定と収益構造の設計を伴う「稼ぐためのビジネスモデル」が不可欠であるとの認識に至った。

今後の課題、展望

最大の課題は、一過性の「盛り上がり」をいかに持続的な経済活動へと昇華させるかである。既存施設の売上低迷という現実を踏まえ、今後は体験、食、宿泊を一気通貫で提供する「滞在型パッケージ」の構築が求められる。展望として、若者が単なる参加者から「企画側」へと深く関与し、学生の感性を活かした新メニュー開発や情報発信支援を通じて、共に収益モデルを設計するフェーズへの移行を目指す。不便さをあえて価値として売る尖った戦略を追求し、自然・文化の保全と経済性を両立させるビジネスモデルへの脱皮こそが、次なるステップとなる。

